

## I.B.Singer の “The Spinoza of Market Street” における再生の「奇跡」

杉澤玲子

Isaac Bashevis Singer の “The Spinoza of Market Street” は、老いと病気に悩まされ、死を目前にひかえたインテリ男性が、結婚によってそれらの切迫から解放され、生への復帰をはかる「奇跡」を扱った短編小説である。本稿では、老主人公が回春し再生を果たした過程を跡づけることにより、“The Spinoza of Market Street” における「奇跡」を位置づけることを目的とする。愛・性・結婚といった本来若者に共有のテーマが、老・病・死という老人固有の苦悩とどのように関わりあっていくのかを、Singer の他の幾つかの短編小説の場合と比較しながら “The Spinoza of Market Street” の具体的作品分析を中心に明らかにしてゆきたい。そして、主人公の再生がいかにして真の「奇跡」に到ったのか、あるいは真の「奇跡」にはなり得なかったのかを、愛と性、さらに、生と死の観点から論じてゆく。

\*

“The Spinoza of Market Street” の Dr.Nahum Fischelson は、生涯をスピノザの研究に捧げた哲学者であり、その実践者たらんとしている。殊にスピノザの『倫理学』についてはこの30年間研究に没頭し、必要な箇所を探さずして開くことができる程に精通している。一時は学者として尊敬され、もてはやされたが、その極論のゆえに異端視され、今は人々から忘れ去られている。スピノザの独立思想に傾倒した彼は結婚を拒否し、僅かばかりの助成

金を受け、マーケット通りの屋根裏部屋で一人貧困生活を送っている。

Fischelson の屋根裏部屋からは、天空とマーケット通りという二つの世界を眺めることができる。惑星・恒星・隕石、それに望遠鏡を通して見る月の表面は、彼にとって “that infinite extension which is, according to Spinoza, one of God’s attributes”<sup>1</sup>である。そして彼自身もスピノザ哲学を实践することにより、この宇宙の一部 (“a part of the cosmos” (81), “a part of the Godhead” (81)) になろうとしている。理性 (reason) と知性(intellect)を人間の至高能力として尊重し, “the highest perfection of the mind” (81)を追求している。一方、眼下のマーケット通りの喧噪、ガス燈や煙りを、理性と知性の最大のアンチテーゼである感情 (emotion) と情熱 (passion) として軽蔑している。

理性と知性を至上のものとし、感情と情熱を軽蔑しているにもかかわらず、スピノザについて誤って書かれた書物を読むと、Fischelson は感情の一つである怒り (anger) に駆られる。あるいは、助成金が届かなくなると、理性のある人間は心配 (worry) してはいけなとわかりつつも、心配で頭が一杯になり、スピノザの認めていない自殺まで考えたりする。つまり Fischelson の理性と知性は、常に感情と情熱の攻撃によって弱められている。<sup>2</sup>従って、Fischelson は感情と情熱によって生活しているマーケット通りの人々に加わることができないだけでなく、理性と知性の完全に純粋な世界に生きることもできない。

さらに Fischelson は、肉体 (body) に対する精神(mind)の優越を信じている。スピノザの『倫理学』に従って、彼は死を恐れていない。しかし、数年間彼を苦しめてきた胃の病気は日々悪化し、自分の肉体が衰弱しながら死に近づいているのを意識している。(もっとも何人かの医者が言うように、Fischelson の病気は神経から来ているものにすぎないかもしれない。) 理性と知性が感情と情熱に抗し切れなかったように、精神も肉体を完全に支配することができない。

このような精神と肉体の不調和、理性・知性と感情・情熱の不調和という不安定な状態は、Fischelson の住む屋根裏部屋に象徴されている。天体にもマーケット通りにも属さず両方の世界を眺める Fischelson は、結局両方の世界から疎外されている。<sup>3</sup> “Old Love” の82歳の老主人公 Harry Bendiner が高層住宅の11階のバルコニーから大西洋を眺め、建物の住人や町の人々と接触を持たずに生活しているのと極めて類似している。Harry と Fischelson は他者とのつながりを断った老齢のアウトサイダーである。<sup>4</sup>

二元論的対立にあってどうすることもできず、死期の近づいていると思われる Fischelson を救い、転機をもたらすのは、隣室に住む Black Dobbe と呼ばれる教養のない中年女性である。Dobbe は痩せて背が高く、へし曲がった鼻、口髭、男性の声と足を持っている。男運がなく、三度婚約しながら結婚できず、市場で「ひびのはいた卵」を売っている。意識を失って倒れている Fischelson を偶然発見した Dobbe は、「善行」を行おうと決心して彼を介抱する。その日から Dobbe は Fischelson の部屋を訪れるようになり、食事を与え、書棚の本の埃を払って新鮮な空気にさらす。Fischelson は、Dobbe の身の上話しに耳を傾けるうちに、以前は全く関心のなかったマーケット通りの人々の生活を知ることになる。

ある夜、Dobbe はこれまで大事にとっておいた数々の嫁入り道具を披露する。“I’m not wasteful, ... I’m a saver...” (90) と言って、おずおずと尋ねるように横目で Fischelson の様子を伺う。そこには病気で気弱になっている Fischelson を誘惑しようともくろむ“行かず後家”の奸計が読みとれる。Dobbe の意図を察知したからこそ、Fischelson は「突然悪寒が走ったかのように身震いした」のであり、「悲しげな微笑」をもらしたのである。最初の接触は偶然であったが、Dobbe は誘惑の意図を持って老人にとりいったわけである。

醜い中年女性の誘惑にどのように Fischelson が屈したか、経緯は明確に描かれていないが、程なくして二人は結婚することになる。Fischelson は

結婚式では新婦の身体にすがって歩かなくてはならない程弱っており、顔色  
は青ざめ、指先は震えている。結婚の儀式の一つである、グラスを足で蹴っ  
て砕く（新郎が新婦の処女膜を破ることの象徴）ことに失敗した Fischel-  
son は、参列者の失笑をかう。高齢ゆえに花嫁との肉体的結合を期待してい  
なかった Fischelson は、屋根裏部屋に戻ると、あいも変わらず『倫理学』  
を読み始める。花嫁が初夜にまとう衣裳で Dobbe が微笑みかけると、Fis-  
chelson は身震いをして『倫理学』を手から落としてしまう。その夜二人の  
間に起こったことは、Fischelson には「奇跡」としか呼びようがなく、あ  
るいは Black Dobbe が魔法をかけたとしか考えられなかった。

Powers long dormant awakened in him. Although he had had  
only a sip of the benediction wine, he was as if intoxicated. He  
kissed Dobbe and spoke to her of love. Long-forgotten quotations  
from Klopstock, Lessing, Goethe, rose to his lips. The pressures  
and aches stopped. He embraced Dobbe, pressed her to himself,  
was again a man as in his youth.(92)

回春して肉体的結合に成功した Fischelson は、若者のように眠りに陥り、  
Dobbe も満足していびきをかいて眠りこんでしまう。

Dobbe の果たした役割は、合理主義によって生命の枯れ果てていたイン  
テリ男性に、性的結合によって生命の息吹を吹き込み再生させたことであ  
る。<sup>5</sup>短編小説 “The Shadow of a Crib” では、ショーペンハウエルに傾倒し  
たインテリが、プライドと知性のゆえに未亡人との結婚を拒否したため、  
Fischelson の場合のような奇跡が起こる可能性を閉ざし、不毛の死へ向か  
うという対照的な展開を示している。Fischelson はスピノザの哲学にある  
“*Amor dei Intellectualis*” (81) を断念して、これまで軽蔑してきた感情と情  
熱に身をまかせてしまう。理性と知性に対して感情と情熱が圧倒したことに  
なる。<sup>6</sup>

性的結合の後の眠りから目覚めた Fischelson は、屋根裏部屋の窓に歩み

寄り、マーケット通りを見下ろし、次に空を見上げる。望遠鏡を通してではなく Fischelson 自身の裸眼で眺めた天空は、彼に新しい驚き “wonder” (92) を与える。昼間の喧噪とは異なり、夜明けのマーケット通りは眠っており深い静けさの中で息づいている。階下からは涼しい風が吹いてくる。かつて暑い夏の夜、身体を冷やすために窓から頭をつき出した Fischelson には天空から吹いてくると思われたそよ風が、今は下界からのように感じられる。火のように燃え立っていた (“of fiery dots” (82)) ガス燈は、星のように明滅して (“flickering” (92)) いる。一方、科学の目を通して惑星・恒星と分類されていた星は、 “there were green, red, yellow, blue stars; there were large ones and small ones, winking and steady ones.” (92) と単純に語られている。時々空を流れていく星は、火のように燃えたつ尾 (“a fiery streak” (92)) を引いている。夜空の様子は、まるでマーケット通りのガス燈とそこに行き交っていた雑多な人々の姿のごとく描写されている。すなわち、今まで Fischelson が天空に望んでいたものがマーケット通りにあり、マーケット通りにあったものが天空にあることを、二つの世界の描写の変化によって示している。Fischelson の新しい視野において、二つの世界は分離されているのではなく融合されていく。<sup>7</sup>

さらに Fischelson は宇宙の完璧性を実感する。より高い大宇宙の視点から見れば、Dr.Fischelson という老人が Black Dobbe と呼ばれる女性と結婚したことはとるに足らないことである。天体は宇宙の法則に従って動き続けている。 “Yes, the divine substance was extended and had neither beginning nor end; it was absolute, indivisible, eternal, without duration, infinite in its attributes.” (93) その宇宙の完璧性は天空だけのものではなく、途切れることなくマーケット通りにまで及んでいる。さらに Fischelson は、自分がその一部であることは避けることのできない運命である (“with his unavoidable fate, was part of this” (93)) ことを認識する。Fischelson は今度目を閉じてそよ風を額にあて、髪がそよぐままにして深呼吸する。もは

や風がどちらから吹いてくるかはここでは問題にはされていない。啓示を得た Fischelson の屋根裏部屋は、以前のように両世界から疎外されたアウトサイダーの住む位置ではなく、むしろ両世界の融合点を象徴する肯定的な場所となる。統合され一体化された世界の一部として自己の位置を確認することにより、Fischelson は生の意味の把握に成功する。

\*

老衰してゆく肉体と理性を持とうとする精神との矛盾に悩むインテリ老主人公が、醜い中年女性の誘惑に屈して再生へのきっかけを得る短編小説に “The Séance” がある。Dr.Zorach Kalisher は一時は尊敬されもした哲学者だったが、現在は僅かばかりの救済金でニューヨークの安アパートで一人暮らしをしている。快樂主義の哲学を唱えていた Kalisher は、皮肉にも性的不能になり、60歳代の今、前立腺で悩んでいる。インチキ降霊術を行う未亡人 Mrs.Lotte Kopitzky は Kalisher を誘惑しようとあれこれ手段をつくしている。ある日 Kopitzky のアパートで子供のように放尿してしまった Kalisher は、彼女の介護を受け誘惑に屈することになる。

老齡のための身体の機能低下による放尿は、身体的に幼児退行を表わしているが、<sup>8</sup>それに伴って主人公の精神状態も幼時期へ退行して行く。Kalisher は Kopitzky の前夫の「経帷子のように冷たい」だぶだぶのズボンをはいて、静かに目を閉じて横たわる。これは、それまで生存してきた Dr.Kalisher の埋葬を象徴している。眠りから覚めた Kalisher は、合理主義者には容認できないまやかしを真実として信じようとする信仰者に変容している。<sup>9</sup>いったん子供に退化して、誘惑者である女性を母として受け入れた Kalisher は、合理主義から解放され、老・病・死の切迫を克服し再生へのきっかけをつかむ。

Fischelson と同様、Kalisher はそれまでの学問的主義主張を捨て、女性の誘惑に屈し、その愛を受け入れて他者とのつながりを取り戻す。女性の愛

によって Fischelson が老人から若者に変身したように、Kalisher は老人から子供に変身する。“The Séance” では Kalisher が性的機能を回復するか否か、Kopitzky と結婚するに至るか否かまでは書かれていない。しかし、永遠の生命を暗示する Kopitzky の最後の言葉 “You’re laughing, huh? There is no death, there isn’t any. We live forever, and we love forever. This is the pure truth.” (206) を笑って受け入れる Kalisher は、Kopitzky との愛によって再生する可能性を大いに持っている。

愛と性は Singer の作品の中心的テーマを構成することが多い。Singer 自身、“I would say that the best contact with humanity is through love and sex. Here, you learn many things about life, because in sex and in love human character is revealed more than anywhere else.”<sup>10</sup>と述べているように、愛と性は Singer の重要な関心事である。だが、Singer における愛と性のテーマで特徴的なのは、老人の愛と性を描いているという点である。既に論じてきた“The Spinoza of Market Street”や“The Séance”以外にも、“Old Love”や“Neighbors”でも老人の愛が中心的テーマとして扱われている。

“Old Love”では、最初、未亡人 Ethel Brokeles に対する性的欲望を伴った愛が老主人公 Harry に若返りの希望を与える。Ethel の自殺後は、遠くブリティッシュ・コロンビアでテント生活をしているという Ethel の娘に対する父としての愛が彼に生を取り戻させる。彼は娘と共に “Why a man is born and why he must die” (433) という課題を考えようと決心する。

“Neighbors”においては、病気で一人暮らしの老人 Morris Terkeltoyb は、アパートから追い出されて困っていた老女 Margit Levy に一緒に住むことを提供し、彼女の介護を受ける。互いの必要から共同生活を始めた二人に一種の愛が生まれる。この二編からも、孤独な老年こそ愛を必要としているというメッセージが読みとれる。

“The Spinoza of Market Street”では、老人の愛のテーマがさらに結婚まで発展して、性の領域に及んでいる。結婚は、精神的な愛を肉体的・物質

的な性に結びつける儀式である。老人の愛と性は、若者の場合より「生きる」ことに深く関わっている。死を間近にひかえ、老化と病気に苦しむ老人にとって、愛と性は生を回復させる欠くべからざる要素となる。結婚によって、愛は身体の中で性の機能に還元され、それが生を呼び起こすことになる。老人において、性は生と緊密な関係にあると言える。Fischelson は Dobbe の愛を受け入れ結婚の儀式を経て、性的結合という「奇跡」を起こし、生の意味を悟る。

\*

しかし、性的結合が真の奇跡として生の回復を可能にするには、女性の愛を受け入れるだけでは不充分である。死から生への方向転換をはかり、再生を成就させるための準備期間としての眠りが必要である。女性が再生のための触媒であるならば、眠りはその成就のための発酵期間である。Fischelson は Dobbe との肉体的結合に成功した後、若者だけが知っているあの深い眠り (“the deep sleep young men know” (92)) に陥る。夢の中で Fischelson はスイスの山を登ったり、走ったり、落ちたり、飛んだりしている。その眠りの後に Fischelson の開眼が行われる。すなわち、愛と性の結合の後、眠りによって死は生へと方向を変え、Fischelson は再生を果たすことができる。また、Dobbe の最初の訪問を受ける直前病に倒れた時も、Fischelson はまどろみながら故郷の夢を見ている。その眠りからの目覚めに Dobbe がいたわけだから、眠りによって女性を受け入れる準備ができていたともいえる。

眠りは Singer の作品において重要な要素を占めている。“The Letter Writer” は睡眠と夢のモチーフがもっとも端的に現われている短編小説である。主人公 Herman Gombiner はニューヨークにある出版社で編集・校正・翻訳に従事する安月給のインテリで、アパートで一人暮らしをしている。栄養失調と病気のため50歳の Herman は体力が弱ってきており、「かろうじて



魂が肉体に留まっている」と感じる程である。現実の生活から逃避している彼にとっては、睡眠中に出現する幻影が真実で、夜明けと共に始まる日常生活は夢からの忘却にすぎない。彼も他者とのつながりを断ち切り、生から疎外されたアウトサイダーである。肺炎のため高熱を出してうなされている Herman はまどろみと目覚めを繰り返す。Fischelson と同じく、夢の中には故郷の町が登場する。目覚めた時、生きることの尊さを悟り、病気の間看護してくれた Rose Beechman という未亡人の愛を受け入れ、Herman は生へ復帰する。そして他者と共に生活を分かち合うこと、すなわち、Beechman との結婚を決意する。<sup>11</sup>未亡人から母へ、そして娘へと変貌した Beechman は、今 Herman の目には花嫁 (“a young Kalomin bride” (275)) となる。こうした Herman の新しい視野は長い眠りから目覚めた時に獲得されている。

“The Séance” でも、放尿して Kopitzky のソファで休んでいる Kalisher は眠りに陥り、夢の中で新しい視野を獲得する。目覚めた時、理性的にはまやかしたとわかっている Kopitzky の世界を半ば無意識に受け入れる。“Old Love” でも、Harry は高層住宅で日々まどろんで暮らしている。Ethel の自殺を知った後、そのショックを癒やすため眠り続ける。そして目覚めた時、彼女の娘に会いに行き、生と死について共に考えようと決心する。

以上のように、眠りと夢は “The Spinoza of Market Street” を始めとして Singer の幾つかの短編小説に共通のモチーフとして重要な彼割を果たしている。<sup>12</sup>主人公が啓示を得るのは、眠りから目覚めた直後である。Herman と同じく夢が作者 Singer の意識に重要な位置を占めていることは、次の発言からも伺える。

Yes, visually. I dream about my childhood, although there is a certain kind of amnesia involved with dreams. When I first wake up, I remember my dreams but the images keep evaporating. If I would write down my dreams the moment I wake up, I could keep

certain parts of them.<sup>13</sup>

さらに、白昼夢についてもそれが彼のストーリーの源になっていることを告白している。

Yes, I'm a daydreamer. I was a daydreamer when I was a child and in this respect I haven't changed at all. . . . In a way, some of my stories grow out of these dreams. While I forget my night dreams, I remember my daydreams more or less because they keep repeating themselves and there is a kind of system in them.

Literature is actually a form of daydreaming, under control or with a purpose. Not with a message, but with a purpose.<sup>14</sup>

作者の眠りと夢に対する関心は、そのまま作品の主人公の新しい視野の獲得の仕方に反映し、作品の重要な要素を構成している。

＊

“The Spinoza of Market Street” は人間としての愛や関わりを拒否し、死の切迫に苦しむ老齢独身男性主人公 Fischelson が、一つの啓示を得て、精神的・肉体的に再生してゆく過程を描いた作品である。従来の主義・主張を断念し、孤高の姿勢を崩し、女性の誘惑に屈することにより再生へのきっかけをつかむ。いわば女性は、主人公がかたくなな自縛から抜け出ることができるか否かを試みるために送られてきた使者である。<sup>15</sup>女性の提供する愛の受容と結婚による性への受肉を通して、従来の二元論的対立を融合した主人公は、さらに眠りという神秘的な発酵期間を与えられ、生と死の融合に成功する。

主人公の再生が、女性だけの力ではなく、眠りとの一体化によるということに、老・病・死という普遍的テーマにも神秘的要素が付加されている。主人公が夢から現実の世界への曖昧模糊とした次元で啓示を獲得したことで

象徴されるように、Singer にとって生と死は相対立する二極限ではない。生と死は眠りを媒体にして、境界線を介さず夜明けの情景のように、混然一体となって存在している。「古い」とは生の終着点ではなく、生と死の混在する時期である。それゆえ、老人の再生という「奇跡」は可能になる。生と死の融合は「古い」という限られた、しかし人間に普遍的に訪れる状況においてのみ達成され得る「奇跡」である。

だが大宇宙の完璧性とその地上への連続性を確認したはずの Fischelson は、彼自身完璧性に達したのではない。Fischelson は震える手で窓枠をつかみ身体を支えながらスピノザに許しを乞う。“Divine Spinoza, forgive me. I have become a fool.” (93) という呟きは、彼が自ら課したスピノザの束縛から解放されなかったことを示している。“fool” とは、Fischelson の理解からすれば、スピノザの教えに反して情熱に身を委ねたことである。しかし、Fischelson の愚かさはスピノザの教えを離れたことにあるのではなく、新たな叡知を完全に理解できずにいることにある。<sup>16</sup> Fischelson と読者の理解の方向は、最終的に分裂をきたし、作品は皮肉な終わり方をする。

結局、Fischelson の開眼は確固たるものとして根づいたのではない。女性の愛を受け入れ、結婚により性を可能ならしめ、老・病・死の切迫から生へ回帰するという奇跡は、眠りを通して始めて実現可能なものである。が、一方では、眠りは本来的に昼間の実生活から遊離しており、夢は極めて不安定なビジョンであるがゆえ、奇跡は真実として定着するかどうか疑わしい。Fischelson の震える手と呟きがその頼りなさを表現している。Fischelson の奇跡はまだ夜の明けやらぬ星空の下で起こったものであり、暁と共に消え去るかもしれない。天空の星が姿を消し、朝日と共にマーケット通りに人々が行き交うようになった時も、その奇跡が持続しているかどうか、作品から断定することはできない。啓示を獲得して終わるかに思えた “The Spinoza of Market Street” は、最終的に思はぬ逆転の可能性をはらんでいる。それは、生と死の融合の「奇跡」が眠りを通して得られた奇跡であるためのパラ

ドックスである。

注

1. “The Spinoza of Market Street,” *The Collected Stories of Isaac Bashevis Singer* (New York: Farrar, Straus & Giroux, 1982) p.81. 以下この作品及び Singer の他の短編小説からの引用はすべてこの版により括弧内に引用頁数を示す。
2. Ben Siegel は, “The Spinoza of Market Street” のテーマを “the eternal tensions between reason and emotion, denial and license” ととらえている。Ben Siegel, *Isaac Bashevis Singer* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969), p.26.
3. Irving Malin と Grace Farrell Lee は共に, 主人公がどちらの世界からも疎外されていると指摘している。Irving Malin, *Isaac Bashevis Singer* (New York: Frederick Ungar, 1972), p.78. Grace Farrell Lee, *From Exile to Redemption: The Fiction of Isaac Bashevis Singer* (Carbondale, Illinois: Southern Illinois University Press, 1987), p. 103.
4. Grace Farrell Lee は, Singer の主人公を慣れ親しんだ世界から疎外された不条理の世界で追放 “exile” に直面しているのととらえている。その典型的な例として Harry Bendiner を挙げ, *From Exile to Redemption* の第一章で論じている。
5. Edward Alexander は “The Spinoza of Market Street” における女性の役割を次のように述べている。 “... the woman represents the creative principle capable of restoring life to men (like Dr. Fischelson of “The Spinoza of Market Street”) in whom the springs of life have been dried up by Spinozist or other rationalisms.” Edward Alexander, *Isaac Bashevis Singer* (Boston: Twayne, 1980), p. 135.
6. Singer は Richard Burgin とのインタビューにおいて, “I would say that the very essence of literature is the war between emotion and intellect, between life and death. ... So emotions are the very topic of literature. Actually, all the arts deal with emotions. ... but when literature becomes too intellectual, which means it begins to ignore the emotions and becomes brainy and cold, it loses everything.” と文学における感情の重要性を語っている。Isaac Bashevis Singer and Richard Burgin, *Conversations with Isaac Bashevis Singer* (Garden City, N.Y.: Doubleday, 1985), pp. 85–86.
7. 二つの世界が統合されたことを証明するために, Grace Farrell Lee は Fischelson の目に映った情景描写の変化を指摘している。 “Dr. Fischelson’s vision synthesizes the worlds of the stars and the street. The street, with its flickering light and deep stillness, is described as the heavens had been, while the

heavens take on some of the color and chaos characteristic of the marketplace below. He sees the world as one, not two, and accepts himself as part of it—not just part of the ‘celestial bodies,’ but of the foolish, physical, human ones as well. . .” Grace Farrell Lee, p. 103.

8. Singer は Burgin とのインタビューで, “The Séance” における放尿に関連して, 身体と心の関係を強く肯定している。放尿は心身のつながりの緊密性を劇的に表す現象である。Richard Burgin, p. 122.
9. Singer は Burgin とのインタビューで, “The Séance” において believer と rationalist との対立を描こうとしたと語り, believer の視点からすれば Kopitzky の世界は真実であるとも述べている。Richard Burgin, p. 122.
10. Richard Burgin, p. 33.
11. Grace Farrell Lee は, Herman が自分が他者を必要とし, 他者が自分を必要としていることを受け入れ, 花嫁との結合によってそれまでの人間からの疎外 (exile) を終わらせることができた, と論じている。Grace Farrell Lee, p. 101.
12. Alvin Rosenfeld は, Singer の作品の多くは “some version of a life-abad” で “an attempt to recover this lost life of dreams” であると論じている。Alvin H. Rosenfeld, “I. B. Singer: The Good of Stories,” *Studies in American Jewish Literature* Number 1, ed. Daniel Walden, pp. 83–84.
13. Richard Burgin, p. 3.
14. Richard Burgin, p. 4.
15. Irving Buchen は, 主人公を誘惑して試す女性の愛を “the corrective power of love” と呼び, love が reason に勝利した主人公にバランスが取り戻される, と論じている。Irving H. Buchen, *Isaac Bashevis Singer and the Eternal Past* (New York: New York University Press, 1968), pp. 133–35.
16. Bonnie Lyons, Ben Siegel, Irving Malin らは, Fischelson の愚かさは結婚によって起きた奇跡の意味を真に理解できなかったことにある, と論じている。Bonnie Lyons, “Sexual Love in I. B. Singer’s Work,” *Studies in American Jewish Literature*, p. 64.; Ben Siegel, p. 26.; Irving Malin, p. 80.